被帽地蔵の図像成立に関する一考察
― 西域起源説の再検討 ―

大澤信（九州国立博物館）

頭巾を被った地蔵菩薩像、いわゆる被帽地蔵の現存作例は、トルファン、敦煌、四川、雲南、山西、寧波、朝鮮半島、日本などに広まり、その成立や各地域間の伝播経路について様々な見解が示されてきた。

被帽地蔵の図像について述べる文献は、敦煌発見の『還魂記』と、北宋・常謹編『地蔵菩薩像霊験記』（以下、『霊験記』）がある。『還魂記』では、襄州（現在の湖北省襄陽）開元寺の僧道明が冥府から閻浮提に戻る道中に錫杖と宝珠を執る被帽地蔵に出会い、帰還後にその姿を描き広めたと説く。『霊験記』では、後晋・天福年間（936〜944）に西印度の沙門智祐が地獄変（被帽地蔵十王図）をもたらし、その原本は西域にあって智祐所持本は写しであると説く。『霊験記』が説く西域起源説や、敦煌仏画に作例が集中することから、被帽地蔵は西域で成立した図像と考えられてきた。しかしながら、『霊験記』は西域起源の図像としながらも、十王、司命司録、府君天君など中国成立の尊像を記すなどテクスト自体への疑問も残される。さらに近年、9 世紀末頃に遡る現存最古の被帽地蔵の作例が四川で報告され、図像の成立背景に関して再考の余地が残されているように思われる。

本発表では、7〜10 世紀における地蔵の信仰と造形の展開を辿りながら被帽地蔵の成立背景を考察する。なかでも菩薩でありながら僧侶の姿で衆生を救済する地蔵の性格に着目し、僧侶像との影響関係をみてみる。

唐朝廷は、安史の乱（755〜763）ののち、五台山信仰を中心に据えてインドなど周辺国をも仏教で統括する政策を打ち立てた。五台山で五会念仏法を創始した法照などの浄土教僧侶もその復興を支え、彼らは念珠と錫杖を携えて念仏を唱えながら各地を遊行した。地獄済度の役割を担う地蔵も念仏行者のイメージの影響を受けて「行道」を意味する錫杖を手にしたと考えられる。敦煌莫高窟蔵経洞発見のギメ東洋美術館蔵「僧形像」（729 年）は、念仏行者と地蔵の図像が結合した作例として重要である。その後、会昌の廃仏（845 年）によって大打撃を受けた仏教教団は教線を門閥貴族から民衆へと拡大し、追善供養や葬送儀礼が発展した。この頃に『十王経』が成立し、その編者に仮託された人物が法照の五会念仏法を継承する成都府大聖慈寺蔵川であった。9〜10 世紀に地蔵十王像の主尊として被帽地蔵が現れるが、同時期に流行した僧伽や宝誌などの聖僧像も被帽形である点は注目される。

『霊験記』には、被帽地蔵を仏教の本現地たるインド・中央アジアの霊験像として喧伝し、中国編纂の『十王経』および地蔵十王信仰の正統性を高める意図が読み取れる。すなわち、被帽地蔵の図像成立は、西域ではなく、四川周辺地域において、中国の浄土教者が地蔵十王信仰を広めるために正統たる西方仏国のイメージを「頭巾」に込めたと考えられるのである。